

『伊勢物語』成立私考 第二稿

— 紀貫之との距離 —

井上英明*

本『紀要』所載の前稿では「伊勢物語成立私考——流動するみやびのテクスト——」と題して、『古今和歌集』成立の背後に、原「伊勢物語」、あるいは「在五が物語」とも言うべき小規模の段群の存在を想定した。本稿はすなわちその第二稿である。

この小規模の段群はある程度「物語化」された在中将の一代記であることが予想されるのであるが、その成立の鍵を握るのは、何と言っても、『古今和歌集』の撰にあたってその中心的役割を果たした紀貫之と、さらに寛平（九三六―九四四）から延喜（九四八―九六九）にかけて活動した歌人、文人の在原業平という人物像に対する反応如何であろう。作者・成立年代に明徴ある草仮名による散文文芸作品は、承平五年（九三五）頃の成立とされる『土佐日記』をもって嚆矢とするので、業平像の核心に迫る有力な人物の一人は紀貫之だと言ってよからう。

本稿は貫之が仮名による虚実交りの日記文芸をものするに至った時の

心境や、その政・官界における背景、加えて同世代の歌人の筆になるいくつかの作品の形態・内容等を考慮に入れつつ、『土佐日記』出現に至るまでの文壇を中心に、ふたたびこんどは別の角度から原「伊勢物語」の存在を予想するものである。

紀貫之は在原業平の生存中に少年時代を送り、宇多（八八七―九〇六）・醍醐（八九七―九三〇）・朱雀（九三〇―九三八）の三代に歴仕したのであるが、ことに『古今和歌集』撰進という大業に携ったのは、時あたかも醍醐帝の「延喜の御代」と後世から追慕景仰される聖代にあたった。

史家によればこの「延喜の御代」こそは前の寛平（八八九―八九七）・昌泰（九四五―九四七）を承けて、一時的であるにせよ、天皇親政が復活し、律令体制がからも維持された時期だと言われる。宇多天皇は関白藤原基経の薨後（寛平三年一月十三日、『紀略』・『公卿補任』他）、摂・関の職を置くことなく、儒林出身の菅原道真を登用し、皇権の拡大につとめたが、三十九歳をもって御位を皇太子敦仁親王（当年十三歳）に譲るときも、その心中は藤原氏北家の進出を押えて菅原氏・紀氏を政務のブレインとすること、醍醐親政における後顧の憂なきを期したのである。そのことは端的に、『寛平御遺戒』の内容から理解できる。すなわち、左大臣藤原時平（八七一―九〇九）に対しては、

左大将藤原朝臣者、功臣之後、其年雖少、已熟政理、先年於女事有_レ所_レ失、朕早忘却、不_レ置_ニ於_ニ心、朕自_ニ去_ニ春_ニ加_ニ激励_ニ令_レ勤_ニ公事、又已_ニ為_ニ第一_ニ之_レ臣、能_レ備_ニ顧問_ニ、而_レ從_ニ其_レ輔_ニ道、新_レ君_レ慎_ニ之、

とある。時平は関白、太政大臣基経の嫡男である。それを「功臣之後」と言い、「先年於女事有所失」は、『今昔物語』巻二十二に説話として出てくる大納言国経の妻を盗んだことを指すのであろうが、「早忘却不置於心」、「自春加激励、令勤公事……」と、以下の文はまさに帝王学の器量の大きさを思わせる。だが、菅原道真についてはがらりと趣きが変わる。

右大将菅原朝臣、是鴻儒也、又深知政事、朕選為博士、多受諫正、仍不次登用、以答其功、加以朕前年立東宮之日、只与菅原朝臣一人論定此事（女知尚侍居之）、其時無共相議者一人、又東宮初立之後、未經二年、朕有讓位之意、朕以此意、密々語菅原朝臣、而菅原朝臣云、如是大事、自有天時、不可忽、不可早云々、仍或上封事、或吐直言、不順朕言、又又正論也、至于今年、告菅原朝臣以朕志必可果之状、菅原朝臣更無所引、申、事々奉行、至于七月、可行之議人口云々、殆至於欲延其事、菅原朝臣云、大事不可再舉、事留則變生云々、遂令朕意如石不轉、惣而言之、菅原朝臣非朕之忠臣、新君之功臣乎、人功不可忘、新君慎之云々、

高棟王の男で「深く公事に熟シク」宇多帝直属の藏人頭を務めた平季長と共に、紀貞範の男で図書頭、文章博士、大学頭、侍従を歴兼し、これまた主上側近の紀長谷雄に至っては、「博涉經典、共大器也、莫憚昇進、新君慎之」といった絶大なる信頼である。この『御遺戒』の聖旨を読みくると、とくに菅原道真の「不次の登用」が目立つ。いかに諸臣に下した公平無私の帝王学そのものの宸翰とはいえ、立太子の儀において道真ただ人と相計って事を定め、二年後の讓位にあたって

「密々」道真に洩らし、道真はかかる大事には「天の時」ありと言い、「忽にすべからず、早くすべからず」として「封事」をたてまつり、「直言」を吐き、宇多帝の「意をして石のごとく転ぜざらしめつ」となって総評、「菅原朝臣は朕が忠臣のみに非ず、新君（醍醐帝）の功臣ならむや。人の功は忘るべからず。新君慎め」と、道真への思い入れは度を越して深い。これでは左大将藤原時平がいかに少壮、政理に熟す藤原時平の俊秀であり、藤原時平の基を築いた基経の嫡男であっても、人臣の常、寵臣道真への嫉視ただならぬものがあつたに違いない。なお醍醐帝立太子の日、帝と道真との間にただ一人、陪接を許された女性は藤原長良の女、淑子であり、『西宮記』巻三「除目」によれば、寛平九年六月十九日に宇多帝の「養母之勤」となり、『政治要略』巻三十の「奉昭宣公書」には、「尚侍殿下者、今上（宇多帝）之所母事、其勞之為重、雖中宮而不得、雖大府（基経）而不得」とあつて菅氏、紀氏を挙げ、藤原氏を排除しようとする宇多帝の切迫した危機意識があらわに見えるようである。

ところが宇多帝寵臣の菅原道真は時平の讒口というより、藤原氏北家の進出の前に、あえなく筑紫国太宰府に左降（延喜元年正月二十五日）。この寛平・延喜の「聖代」もたんに律令政治の故態が最後の夕映えを放つたまでのことで、やがて一条朝における藤原道長の摂関体制が盤石化するまでの一時の泡沫のごとき歴史の一階梯に過ぎなかったと言うのは多くの史家の説くところである。けれども、まだこの時期は藤原氏が他氏排斥を強行して来たにしても、一応は天皇親政の方向に足並みを揃え、からくも律令体制の維持に天皇と廷臣氣を一にして努力するところであつた。そのことは道真を讒言し失脚させた当の藤原時平が、實際上の執筆ではなかつたにせよ、延喜の初発、『三代実録』五十卷、『延喜格』

十巻を撰進していることで、あくまでも天皇親政の功臣たる面目を發揮したことからもうなずかれる。そして間もなく延喜三年二月十五日、道真は九州大宰府配流の地に春秋五十九をもって、左大臣時平も十一年後の九年の四月四日に跡を追うかのようになり三十九歳をもって薨じた(『紀略』)。したがって寛平三年(八七二)、藤原基経の薨去から四十年ばかりしてその次男藤原忠平(八八〇—九四九)が延長八年九月二十二日・天慶四年十一月八日に撰関の地位に復するまでの間、言い換えれば、宇多・醍醐の両朝にわたる紀貫之の生涯こそは、ともかくにも天皇親政が維持され、外国との交渉は外に絶たれ、内には和歌を中心に国風の振興の気運盛んなるものがあり、宮廷には各種の歌合せが流行し、ひたすら漢文学に對峙する国文学の興隆の時運に向っていったのである。『古今和歌集』「仮名序」の貫之の文はこうした政治・外交政策を背景として考えなければ、とてもその真意は掴めない。しかも藤原氏他氏排斥の犠牲になった他の衰落の貴族は人麿以来の和歌勃興の道に才華を拓くことによって、天皇親政の恋闕の情にかろうじて、あるいは芸術的矜持をもって繋りえたのである。

『古今和歌集』撰者四人が、ことごとく藤原氏以外の氏姓に出る微官であることは如実にこのことを物語るが、それにしても藤原北家に対する天皇——宇多・醍醐——の執意は、政略の余波として逆に文芸に実効をみせたわけである。すなわち、大内記紀友則、御書預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府壬忠岑(『古今和歌集』仮名序)と、彼らの官職は政権の中核とはおよそ縁遠いものであった。しかもそういう微官の廷臣たちに醍醐天皇は「いろいろのみのいへにむれ木の、人しれぬこととなりてまめなるところは、花すゝきはにいだすべきことにもあらずなりにたる」(『古今和歌集』仮名序)私的抒情詩の勅撰を決断し、落飾後の

宇多天皇も洛外大井川への行幸(延喜七年九月十日(『紀略』)、亭子院歌合の開催(延喜十三年三月十三日)を挙行し、漢詩・漢文の世界から国文学への彼らの文芸的余技に公的權威を賦与せしめ、神代以来の和歌文学にこうした廷臣の美的世界への出世間的要求を満足させることにすぐれた政治的判断を下したのである。したがって貫之の文芸的生命は宇多・醍醐両帝の王政復古の意思なくしては到底考えられぬものなのであった。『古今和歌集』と『大井川行幸和歌』の両仮名序はすぐれた国文であるにせよ、漢文的思考が先行しており、行文には六朝以来の四六駢儷体の遺響があつて、あくまでも天皇と男性中心の宮廷を意図して彫琢されたものであつたといふことができる。

——かくこのたびあつめえらばれて山したみづのたえず、はまのまさごのかずおほくつもりぬればいまはあすかがはのせになるうみもきこえず、さいれいしのいはほとなるよろこびのみぞあるべき

(『古今和歌集』仮名序)

……行く水の大堰の川辺に行幸し給へば、久方の空には棚引ける雲もなく行幸に候ひ、流るるれば底に濁れる塵なくて御心にぞかなへる。(『大井川行幸和歌』序)

両仮名序の特徴的な文体と判断される部分を抜き写してみたが、かく流麗にして一見堂々たる文章の中の背後に、いかに貫之が宇多・醍醐両帝の權威に支えられ、これに小心翼翼、忠誠をささげることにおいてのみ歌人としての栄光と、精神の典雅な秩序を保ちえているかが推測される。しかし、三十一文字の形式を神代より伝えられた絶対的なものとあ

えて信じ、それを標榜し、その端正な詠歌が多く類型に執しつつも、和漢にまたがる博学の古典主義者として当時の歌壇に指導的な役割を果たしたのは、終生藤氏権門の主流を離れた一文官として律儀に身を処さざるをえなかったからである。貫之がその碌々たる官歴の終末にあたり、ついに仮面をつけつづけた面貌を失って、より私的な、より内面的な心情の機微を敢えて侍女の筆に仮託して認めざるを得なかったことは、おそらく歌壇の巨匠晩年の悲喜劇とも言える。『土佐日記』にはユーモアとペーソスをまじえた戯作者流の筆づかいがあるにせよ、獲麟は全篇の語戯・諧謔をうらぎるかのように老学匠の私的悲しみの境涯を伝えている。

わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてん。

もっとも、恵慶の頃には「つらゆきがとさの日記をえにかける」ものがあった、さらに『後撰集』は『土佐日記』の歌を貫之作として羈旅歌に入れてから「破りすてた」わけではないにしても、このポーズこそが醍醐親政の擬制をも問わず語り語りに語っているかのごとくである。しかし、もとよりそのことが右の獲麟の真意を転倒させはしない。

従来、『土佐日記』の主題として貫之の歌学上の理念や知識を指摘する人は多いが、それは作者が当時第一級の歌詠みとあってみれば、むしろ当然の知的虚栄の披露にすぎない。ここで『土佐日記』執筆の動機を特に注意深く索ね、作者の心理の内面に思いを致すと、わが邦仮名日記の開山とうたわれた独創の人も、ついに伝統を迂回してそのオリジナリティを勝ち得ることはゆるされなかったことを思い知らされる。そこで

いささか当時の貫之の心事に立ち入って考え、いくつかの先行作品を予想してみる。

延長八年（九三〇）正月土佐守に任ぜられてかの地に下った貫之は、僻陬の地にあつて政務に携わる傍、かねての醍醐天皇勅命通り「弘仁より延長に至る詞人の作」を抽いて『新撰和歌集』四巻を編纂したが、その前後にあつて、まさに骨髄に徹する悲しみを味わっている。すなわち、醍醐天皇（延長八年九月二十九日）、宇多法皇（承平元年七月九日）、藤原兼輔（承平三年二月十八日）、さらに『土佐日記』における貫之の一女児、この四人がつぎつぎに崩御、薨世、死没したことである。終生のパトロンたる両帝に先立たれ、土佐で一女を失い、『新撰和歌集』「伝勅」の藤大納言兼輔（これも帝について彼のパトロンであったと言われる）も他界した帰京当初にあつて、なおも表現の魔に憑かれて筆硯を洗った貫之の心中には、それを察するに余りある資料を彼自身の作品において確認することができる。すなわち、『新撰和歌集』の序文である。

……貫之未_レ及_二抽撰_一。分_レ憂_二赴_一任。政務餘景漸以撰定。——中略
——貫之秩罷歸日。將_二以上_一獻_レ之。橋山晚愁雲之影已結。湘濱秋竹悲風之聲忽幽。傳勅納言亦已薨逝。空貯_二妙辭於箱中_一。獨屑落_二淚于襟上_一。若貫之逝去、歌亦散逸……

心中、醍醐天皇の不例を気にしながら任に赴き、帰京すれば兼輔も「亦已」に薨じていた。貫之と兼輔との関係は彼が宰相になった時、慶賀の詠歌を贈っているし（『貫之集』六九二「朝日古典全書」）、官位こそちがえ、日頃から老齢を忌憚なく嘆き合う問柄であったし、また貫之は兼輔を頼っていたことが『貫之集』における次の歌の「松にかくるる」

の比喩でわかる。

おなじ中将（兼輔）のみもとにいたりて、かれこれ松のもとに下りて、酒などのむつひで

影にとてたちかくるれば、唐衣濡れぬ雨降る松の声かな

兼輔の薨去を記した『新撰和歌集』序文の文字はさらに貫之の悲しみを伝えた歌によって、その意味が十分に理解できるようである。

①兼輔の朝臣なくなりて後、土佐の国よりまかり上りて、かの粟田の家にて

植ゑおきし二葉の松はありながら君が千歳のなきぞ悲しき（『後撰和歌集』巻二十）

②ある上達部（兼輔）の失せ給へるのち、久しくかの殿にまゐらでまられるに、琴ども淋しくあはれに鳴りたるに、前栽の草木ばかりぞかはらずおもしろかりける。秋のもなかなり、風寒く吹き、竹・松などのおもしろければ、詠みて上に奉り入るる

松もみな竹も別れを思へばや涙の時雨ふる心ちする（自撰本『貫之集』（山内家蔵切）——萩谷朴氏「朝日古典全書」所収）

なお、右②の詞書は歌仙家集本には「京極の中納言うせ給ひて後、粟

田に住み給ふところありける、そこに到りて前栽に松竹などあるをみてよめる」とあるので、前歌①「植ゑしおきし」と同時の詠ではなからうか。

このような環境にありながら、貫之はなお一官吏としての、現実的でみじめな悲哀に見舞われていたのである。やはり『貫之集』に、

官なく歎くあひだ、正月のころほひ、坊城の左衛門（師輔）の督のもとに大臣殿（忠平）のよきさまに申し給へと申し奉るついでに、これ奉り給へとて奉る

朝日さすかたの山風いまだにも身のうち寒き氷解けなん

枯れ果てぬ埋れ木あるを春はなほ花のゆかりに避くなどぞ思ふ

萩谷朴氏によると（朝日古典全書『土佐日記』・『紀貫之全集』頭注）、この「官なくて歎くあひだ」は、貫之が土佐から帰京して天慶三年玄蕃頭になるまでの五年間の空白期をさすと言う。そこでもしこの五年間が官なくて風塵を走る境涯であったのなら、老齢の貫之に残されたのは、おそらく過去への回想しかない。そのことは土佐から帰京した承平五年の十二月、「いにしへを恋ふる心のあるがうへ君を今見てまたぞ恋ふべき」（他撰本『貫之集』）と詠んでいることから推察される。この歌は詞書によると当時左衛門督であった実頼の男女君達の冠りと裳着の夜に、殿の歌の返しとして詠んだものである。貫之の歌の核心は、「いにしへを恋ふる」にあって、眼前の君達ではない。

そして既掲『新撰和歌集』「序文」は約三十年前の『古今和歌集』「仮

名序」の意気軒昂たるにくらべて、全篇悲愁の影につつまれていて、しかも、「昔延喜之御宇……」と起筆していることが、きわめて暗示的である。したがってこの時の貫之の心中は未来に希望とてなく、激しく国文学振興時の過去に接近していた筈であり、序文を草する筆は亡き醍醐天皇への追憶を誘い、さらにそれが三十年前の『古今和歌集』撰進の延喜の思い出に結ばれて、主上と自分とがとりもなおさず惟喬親王と在五中将との恩愛に比されたはずである。これが通常の日本人に理解可能な感覚である。『新撰和歌集』『序文』『貫之集』、さらにはできあがった『土佐日記』末尾の一節を交互に考え合わせる時、わずか六十日足らずの日記を書くのに、何か作者の精神にただならぬ動揺があったようである。もっとも、『土佐日記』には作者を忘れて読むかぎり、明るい俳諧的風刺や語戯や、京に近づく無心の喜びなど、到るところに見られることはすでに諸家の指摘するところである。しかし滑稽・諧謔は必ずしも作者の心境の順風を意味しない。その逆である場合が多い。既述のごとく、作者周辺の事情と心境を察するに、それらをとことく作者の明るく、い心からの笑いだとみなしがちの通説には大いに疑問が持たれるわけである。むしろ貫之のかかるユーモアと明るさは、眼底に涙なきを得ないアイロニーと解すべきで、そのことが同時に敢えて仮名の採用・女性仮託・虚構への意志等々の、姿態に粉飾された近代文学的悪弊を生じせしめたのではなかったのか。このへんの経緯については、かつて石川徹氏が、臼田甚五郎・小宮豊隆・重友毅・萩谷朴の諸氏（石川氏『古代小説史稿』所収「土佐日記に於ける虚構の意義」）が尽くしているの、今は立ち入る時ではないが、ただ『土佐日記』における諧謔・明朗性の真意は、石川氏が引いて賛している（『前掲書』一六三頁）藤岡作太郎の批評、「国学者評して軽妙洒脱、洵にわが古文の標本たるに適ふとす、されど、余

輩の見によれば、土佐日記の特色として推さるる滑稽諧謔は、真の滑稽諧謔にあらずして、一見極めて重苦しく、単に文学上の遊戯にすぎず、その文軽妙なるが如くしてしかも軽妙の境を去ること遠きにあらざるか」（『国文学史講話』一二〇頁）という解釈が、今日に減びないようである。また、岡一男の「貫之自身謹厳ないちめん頗る諧謔を好んでおり、それがこの日記の著しい特徴をなしていることは動かせないが、それとこれとは決して矛盾することなく、一方は現象として、他方は本質として存在している」（『紫式部日記』までの日記文芸——『源氏物語の基礎的研究』一九四—五頁）、という批評で万事は解決すると言える。『土佐日記』中の語戯・滑稽・諧謔の妙は、『竹取物語』からの影響として十分論じ得るし、貫之が『竹取物語』を絵巻物として筆写しているので（『源氏物語』絵巻）、かなり興味深い結論を予想できるが、『竹取物語』は作者の私生活から一応絶縁した全くの空想上の作品であり、『土佐日記』の先行作品はより現実的で、さらに自叙伝的な次元において求められなければならない。では承平五年以前、つまり貫之の周辺に文学史の客観的事実としてそのような作品が存在したか。それには、『篁物語』・『平仲物語』・『伊勢集』などが考えられるが、現存の形にまとめられたのは、無論、貫之以後のことだろう。しかし、これらの粉本が相当に物語化されたものとして——現存本と大してちがわぬもの——、貫之以前に流布していたとしても、この三つの作品は、『土佐日記』の文体内容とも頗る性質を異にする。そこには、『土佐日記』の語戯・諧謔など少しもなく、いわば対象をつきはなしてながめる自嘲的なアイロニーや洒脱さが欠けている。主題は深刻で（『伊勢集』冒頭）、うらさびしく（『平仲物語』）、グロテスク（『篁日記』）なものである。したがってそれらは『土佐日記』を生み出す側面的な勢力として、あるいは一代記ならぬ自叙伝的作品と

して形態的に『土佐日記』との相関関係を説明することは可能であるにしても、作者の同族意識というより精神上の血脈において、篁・平貞文・伊勢の御を貫之と同一線上に結ぶことには無理がある。では誰であろうか。

紀貫之の先輩は何としても在五中将でなくてはならない。すなわち『土佐日記』の作品としての源流の一つは、『伊勢物語』の「原型」でなければならぬのである。「原伊勢物語」あるいは「在五が物語」こそ、『土佐日記』をはじめとし、『平仲物語』・『伊勢集』等の出現の可能性を生みだしたもので、しかも形態的に影響甚大なばかりでなく、彼こそは寛平・延喜・延長三代にわたる芸苑の偶像だったと言える。今はそのことだけを仮説としてかかげて、ただちに成立期の明確な『土佐日記』をみてみよう。

『土佐日記』は無論、恋物語ではなく、紀行の歌日記である。西国から京都までの約五十六日間の旅行記である。全篇を貫くものは、「けふはみやこのみぞおもひやらるる」によって代表される「都恋しさ」である。このみやこの世界への郷愁を一そう効果あらしめるために、京で生まれ土佐で死んだ女兒への愛惜が点綴されている。もっとも、「都恋しさ」を主題とした歌による旅行記の源流を『万葉集』「羈旅歌あたりにもって行って、そこから説きおこせば話は別である。単純な「都恋しさ」と屈辱をひめたそれとは性格が異なる。『万葉集』の場合は古代帝都への観想が生きており、いきおいその恋宮も国の「まほろば」的古代である。そこで今は仮りに舞台を逆転させ、昔、「東国」にあって「都恋しさ」に落涙した詞人を貫之に近い落魄の先輩に探せば、ただちに『伊勢物語』中の「東下り」の「昔男」在中将が浮び上ることは自然のなりゆきである。すずろなる旅路にあって、眼に触れる風物や行き交う旅人に

託して京に思う人をしのんだ作品、貫之はおそらく三十年前の延喜の御代『古今和歌集』撰進の際に、「在五が物語」に存した「東下り」の内容を可及的に温存し、他の歌に比べ長大な詞書を付してこれを「羈旅」に収載せしめたことは、文献学的反証を超えた文学的真実である。就中、在中将の東国出奔がいかに「心細く」、かつ「わかれぢ」にあって都の恋しさがどれほど切実だったかを、おそらく、『古今和歌集』撰進以前に貫之はわれとわが身において実感し得ていたはずである。すなわち、『古今和歌集』「羈旅」における在中将の「東下り」の二首後に、われわれは貫之の東下りの事実を容易にみつづけることができる。

あづまへまかりける時、みちにてよめる

つらゆき

いとによる物ならなくにわかれぢの心ほそくもおもほゆる哉

おそらくこの歌は、貫之の青・壮年時代の作であろう。したがって、その時から春秋すでに三十を越え、今度は西国の辺境から京都の自宅までの陸路ならぬ海上の旅、しかも内外悲痛の境涯にあってこれを草するにあたり、業平朝臣のしたためた、「京に思ふ人なきにもあらず」・「わがおもふ人ありやなしや」なる詞章が、『伊勢物語』本来の文脈とは別に、今や貫之の心象において亡き醍醐帝、亡き兼輔、亡き女兒らへのイメージと錯綜し重なりあっていたのであろう。しかも、既に見たように近親四人を喪った身の寂寥は、とりもなおさず惟喬親王と業平が桜狩りした渚の院を通過する時の回想に慰められ、最も感動的な叙述となりいきおい在中将については二度の言及となる。これは異例のことではなればならない。西国土佐から京への旅日記の発想は、いろんな面で「原

伊勢物語」の存在を想像せしめるばかりでなく、『土佐日記』全体の、修辭・技巧・機智などもじつに在中將の故智にあやかることすこぶる大きいものがあつた。以下、具体的に本文についてみると、十二月二十七日条に、

かちとりものあはれもしらで、おのれしさをくらひつれば、はやくいなんとて、「しほみちぬ。かぜもふきぬべし」とさわげば、ふねにのりなんとす。このをりに、あるひとぐをりふしにつけて、からうたども、ときにつかはしきをいふ。また、あるひと、にしくになれど、かひうたなどいふ。

この条りは鹿兒の崎の浦でその守の兄弟と酒を汲み交し、惜別の歌を二首詠んだ直後のことである。そこで①は、『伊勢物語』九段で一行がすみだ河のほとりで、

その河のほとりにむれるておもひやればかきりなくとをくもきにけるかなとわひあへるにわたしもりはやふねにのれ日もくれぬといふにのりてわたらんとする……

の一節に連想を得て書かれたものであろう。さらにこのような推測を強めるのは、②「にしくになれど、かひうたなどいふ」という一節である。一行の内、「あるひと」が西国だけ、「甲斐歌」を詠んだということは、単に、「東西対照の諧謔」(岩波古典大系本頭注)という説明で満足させるであらうか。勿論、そのような諧謔をねらった意図を否定するつもりはいささかもない。むしろそれは正しい判断であらう。しかし本稿が積極

的に主張したいのは、西国旅中、惜別のシーンにあって甲斐歌、よりもよって船中の主人がこの東国の歌を誦んじたことは、「ある人」が貫之であるだけに、彼の心象においてかなりの必然性を有するものだということである。もっとも他にもこの種のユーモアはあるが……。

言うまでもなく甲斐歌は、往時にあって「東国」の民謡とされ、『古今和歌集』巻第二十「大歌所御歌」の「東哥」に二首(一〇九七―九八)採られている。すなわちヤマトタケルの神詠以来宮廷につながるものである。そして貫之自身、唐歌に対する倭歌として親しんでいたであろう。それをここに出したのは、場面文脈が『伊勢物語』九段に似るものであるだけに、やはり東下りの連想のなせる業と解したのである。なお、『大和物語』百四十四段にある、業平の二男(『古今和歌集目録』)、在原滋春に関する説話はこのことにむすびつけて一段と興味深いものでなくてはならない。

この在次君、在中將の東にいきたりけるけにやあらむ、この子どもも、人の国にかよひをなむときどきしける。心ある物にて、人の国のあはれに心細き所々にては歌よみてかきつけなどなむしける——中略——歌二首有り——かくて人の国ありきく、甲斐の国にいたりて住みけるほどに、病して死ぬとてよみたりける

かりそめのゆきかひちとぞ思ひしを今は限りの門出なりけり、とよみてなむ死にける。此の在次君の、一所に具して知りたりける人、三河の国よりのぼるとて、この駅どもにやとりて、この歌どもをみて、手は見知りたりければ、みつめて、いとあはれと思ひけり……

「甲斐路」を詠みこんで果てた滋春の歌は『古今和歌集』哀傷の部に

父業平のそれと並んであるが、『土佐日記』では西国だけど、甲斐歌を詠んだ「ある人」は、父の東下りを思いうかべながら、わが父の因果でなお東国甲斐国の話を聞き及んでいたにちがいない。

惟喬親王と業平への貫之の追慕は二月九日条に、きわめて感動的に叙されている。しかもこの兩人が、かつて渚の院で桜狩りをしたことを描いた『伊勢物語』八十二段は、その修辭において強く『土佐日記』のそれに類似することを詳細に説いたのは故五十嵐力の『平安朝文学史』上であった。

二月九日

かくてふねひきのぼるに、なぎさの院といふところをみつゝゆく。①その院、むかしをおもひてみれば、おもしろかりけるところなり。しりへなるをかは、むめのはなさけり。ここにひとくゝのいはく、②これ、むかしなだかくきこえたるところなり。故これたかのみこのおほんとも、③故ありはらのなりひらの中将の、「よのなかにたえてさくららのさかざらばはるのこゝろはのどけからまし」といふうたよめるところなりけり。

右は『古今和歌集』詞書では、「なぎさのむむにててさくらをよめる」とあるだけだから、やはり『伊勢物語』八十二段前半の内容を踏まえてあるものでなければならぬ。殊に①②に注目すると、主従の情愛に結ばれた桜狩りの宴が、貫之の執筆時から約六十年前の過去のこととして、回想的に叙されている。さらに③④は、すでに五十嵐の批評、「つい此間亡くなった人を懐かしむような心持」(『前掲書』二四七頁)を現わすも

のであることは間違いなく首肯すべきところであろう。因みに惟喬親王は寛平九年二月(『愚見抄』・『古今和歌目録』は不詳)・(『紹運録』貞観十五年二月二十五日)と、それぞれ薨時に異同をみせ、問題が残るが、業平は元慶四年に卒しているの(『三代実録』)おそらく業平に遅れることいくばくもなく親王も薨じたのであろう。そうするとそれは貫之の青年時代の消しがたい記憶であり、右の一行には見るかげもなく荒廃した渚の院に「故人」の詠歌の響を聞くのである。

いまけふあるひと、ところにてたるうたよめり、
ちよへたるまつにはあれどいにしへのこゑの寒さはかはらざりけり、
またあるひとのよめる

きみこひてよをふるやとのむめのはなむかしのかにぞなほにほひける、

もう一箇所、一月八日条に、業平歌の「やまのはにげていれずもあらなん」が引かれ、親王に対する貫之の深い傾倒の情を知ることができる。その他、『土佐日記』と『伊勢物語』に用いられた修辭の類似を指摘すれば若干あるが、結果的に言えば両者は全く性質を異にした散文である。周知のごとく『伊勢物語』は和文による物語文の典型である「けり」・「ける」の助詞詞で文を短く切り進み、過去に生じた事象を「現象現在」(岩波古典大系山岸徳平『源氏物語』(補註一)において詠嘆的に喚起していく方法がとられているが、『土佐日記』での「けり」(十八例)・「ける」(十四例)は、先述の「渚の院」や「阿倍仲磨」を懐想した条に類出するのであって、『土佐日記』全体を領する典型的な文体は、

一月十二日、あめふらず、ふんとき、これもちがふねのおくれ
たりし、ならしづよりむろにつきぬ。

十三日のあかつきに、いささかにあめふる。しばしありて
やみぬ——下略——

十四日、あかつきよりあめふれば、おなじところにとまれ
り——下略——

二月十二日、やまざきにとまれり。

十三日、なほやまさきに。

十四日、あめふる、けふ、くるま、京へとりやる。

といったぐあいに、漢文訓読調と言うより、もと漢文体を仮名に書き改めたような簡潔な記録的スタイルである。しかも、例えば、副詞の「たがひに」・「ひそかに」・「すみやかに」・「はなはた」・「いまし^全」・「いささかに」等々の漢文訓読体のみ見られる語法が殆んど全文を覆っているのだが、『伊勢物語』にはかかる訓読語の用法はきわめて少なく、むしろ例外的なものと言ってよい。ところが、このように両者は頗る異質な文体であるにもかかわらず、時として『土佐日記』は『伊勢物語』にきわめて類似した修辞上の特色をみせるところがみられるのである。その共通性と異質性を判別し、貫之はあくまでも『伊勢物語』の骨は換え得てもついに胎は奪い得なかった——両者は主題と方法が異質であるけれども——こと、そのことは結論を先取りすると、貫之が『土佐日記』に用いた修辞上のテクニックが『伊勢物語』のそれと外形的に同じであっても本質的には異質であるため、その事が逆に貫之以前の「原伊勢物語」『在五が日記』の存在を予想せしめることになろうかと思うので

ある。「在五が日記」とはもちろん当時の仮称である。今日みる日記文芸では『土佐日記』が最初だから。

まず、『伊勢物語』八十二段に、「かみ・なか・しもみな歌よみける」という一節があるが、これが『土佐日記』において、「上中下」（十二月二十二日条）・「かみなかしも」（一月二十二日条）・「かみしも」（一月二十四日条）と三度にもわたって使用され、しかもこの用語は『古今和歌集』の詞書になく、『伊勢物語』八十二段にのみ存するのである。その他、「夜一夜」・「日もはる」・「おりゐて」・「たへずして」などは、『伊勢物語』・『古今和歌集』詞書にすでにそのまま引き写されたものであるが、殊に『伊勢物語』・『土佐日記』両者において似て非なるものの典型的な表現法として、客体的乃至臆化的自己表示に用いられた、例の「謙退卑下」のことがあふ。すなわち、二月七日条に

かゝるあひだに、ふなぎみの病者（貫之）、もとよりこちくしき、ひとにて、かうやうのこと（歌）さらにしらざりけり。

とあるのは明らかに謙退卑下の意図をもつ。ところがこの表現法が『伊勢物語』においては、

もとより歌のこと、はしらざりければ、（百一段（塗籠本ナシ））
むかしおとこ有けりうたはよまざりけれど世の中を思ししりたりけり（百二段）

となるのである。但し「塗籠本」（全文）・後者は古本系の「最福寺本」にのみ欠けていて、断定を急ぐことはさしひかえられる。が、その他の

諸本にはすべてこれを載しているから、あながちに貫之の創造発明にかかるとはなかつたであろう。

一月九日条に、また『土佐日記』では自己を「翁びと」と呼称しているところがある。

かくゆきくらしして、とまりにいたりて、おきなびとひとり、たうめひとり、……

『伊勢物語』にあつては、殊に後半から末の諸段において、「昔男」がこの「翁」なる呼称を装って集中的に登場して来るのである。

このえつかさにさぶらひける翁(七十六段)

右のむまのかみなりける翁(七十七段)

御おほぢかたなりける翁(七十九段)

かのおきな(八十一段)

○かたる翁(八十一段)

中将なりける翁(九十七段)

○なまをきな(百十一段(広本))

○おきのなりあしき(百十七段「広本」)

「昔男」に対するこうした翁の類いの形容は、「近衛司」・「右馬頭」・「中将」等すべて業平四十歳(貞観六年)以後のことであり、専ら老境にある主人公ということとして無理なく読みとれるが、しかし○印を付した「かたる翁」などの記述などは、ともすれば老醜に対する蔑みの気持が含まれていると言えよう。ところが前者、『土佐日記』の「おきな」

は船中にある老齡そのものの貫之自身を指し、言までもなく「老人」の意であるが、単に「おきな」とせず、「おきなびと」としたのは、香川景樹の『土佐日記創見』によると、「他より、いやしめずいふ詞也」と言うことである。そうすれば一行の長老・総帥たる自負の気持がそこにくみとれる。この長老・総帥という自覚は『土佐日記』にもう一箇所ある「翁」の呼称、すなわち、一月十八日条に、

このうたどもをすこしよろしきとききて、ふねのをさしけるおきな、つきごろのくるしきころやりによめる

である。「ふねのをさしけるおきな」については、岸本田豆流『土佐日記考証』は、「歌がらをみるに紀氏みづからの歌なる」べきゆえ、貫之自身ととり、景樹の『創見』もそうとっているし、現代の諸家もすべて紀貫之自身をさすとしているから、結論として、『土佐日記』の翁は、謙退卑下の逆とみてよいと思う。『伊勢物語』と『土佐日記』における自己表示はかく方法において同一であるけれど、内容において異質であり、しかも『伊勢物語』にある「かたる」なる表現を貫之が使うのは、「この楫取は日もえはからぬかたるかな」という一節にであり、あくまでも無知下賤なる楫取に対してであった。当時において理解されていた「かたる」の意味は、例えば、

乞兒、列子云。齊有貧者。常乞於城市。乞兒曰。天下之辱莫過於是。『倭名類聚鈔』卷二(乞盜類)。

に代表されるごとく、それは乞盜の類にあつて、「天下の辱」と意識さ

れていたのである。「翁びと」貫之がこれを「楫取」につけたのは、きわめて常識的な使用方法で、そこに戲画的なアイロニーはもともと存在しなかったものとみてよいのではなかったか。

もっとも、『伊勢物語』の「かたる翁」は、『愚見抄』（一条兼良）では、「佳躰の心にや。中将の事を国史に躰貌閑雅なるよし記せるゆゑなり」といって、異説がないわけではないが、やはり既述、『倭名類聚鈔』・「乞児」の例をとって卑下の意に解する契沖の『勢語臆断』に従うべきであろう。そのことは、この語句をもって中将の自記説を再燃させることは、一方で、真淵の『古意』がいましめるごとく、なお議論の余地がある。少なくともここでは契沖こそが旧注の「非合理」を「合理化」したままで、定家の「奥書」・「比興謙退之詞」を正しく復活させたとみるべきだからである。

貫之は晩年の散文においても『伊勢物語』の文脈・修辞・技巧・機智に負うところ大きく、したがって、貫之が『古今和歌集』編纂の折に資料とし、かつ『土佐日記』執筆の際に意識した「原伊勢物語」・「在五が物語」の形態は、今日みる『伊勢物語』の形態よりもずっと簡略な詞章であったと思われるにせよ、かなり、「物語化」されたものとみることができよう。しかも、『古今和歌集』収載の業平歌三十首以外の形をもつ歌及び詞章もすでに流布していたことは、『土佐日記』の分析から発見できるのであり、さらにこれを貫之の体験内に求めていけば、またそこに新しい資料をもち出すことができる。例えば、『古今和歌集』にならぬ『伊勢物語』第六段の「しら玉かなにとぞ人のとひし時つゆとこたへてきえなましものを」は、「弘仁より延長に至る詞人の作」の一つとして貫之の『新撰和歌集』恋雑の部にとられているからである。

以上われわれは、貫之とその作品を中心に「原伊勢物語」の存在を仮想してみた。論述の過程にあって、『伊勢物語』と『土佐日記』の修辞上の類似性を指摘すると同時に、その異質性をもつとめて強調したのは、折口信夫以来一部の諸家に紀貫之をもって『伊勢物語』の作者とする説があるためであった。周知のごとく、現存『伊勢物語』には貫之作の歌が二首(第七十五段)混入し、かつ、すでに論じたごとく、『土佐日記』と『伊勢物語』のうち、殊に第九段東下り及び第八十二段惟喬親王渚の院の桜狩りなどは文体修辞においてただならぬ共通点がみとめられた。ところが貫之の特に晩年の『土佐』執筆時における精神上の位置は、『伊勢物語』における奔放な愛欲の風流みやびの世界に到底つながるものではない。あくまでも現実に喪った主従関係と女兒への愛惜を作品の世界において再現したいという情情的願望にすぎない。それは土佐からの京への帰任という体験的事実が『伊勢物語』東下りの紀行文スタイルにたまたま付会したにすぎない。

さて、つぎに「原伊勢物語」と『土佐日記』とを結ぶ文学的年次的流れの中において、文芸の形態論から言って、両者の中間に位置するともに、それらの相関関係の傍証ともなるべき作品——つまり、「原伊勢物語」から情情的な影響を蒙り、かつ『土佐日記』出現の必然性を納得させるものをたずねてみると、まず、六歌仙の先駆的な歌人、小野篁の自叙伝的物語である『篁物語』（彰考館本）・『篁集』（書陵部本）がある。これらの物語の祖型、あるいは粉本が仮りに貫之以前に存在し、かつ形態も現存本とさして違わぬものであったとしても、内容はすぐれて民間説話的であり、歌がたりのであり、『伊勢物語』のようなみやびを構成する世界とはほど遠いものであったにちがいない。『古今和歌集』前後

に溯及しうる具体的な素材は少なく、「原伊勢物語」・『土佐日記』は無
論、平安初・中期の家集その他に『伊勢物語』的世界の直接的な痕跡を
確定するのは至難である。現行『篁物語』から原篁集のごときものを推
定することができないのと同断である。

それでは他に何が存在するかと言えば、貫之と共に宇多帝の歌壇に活
躍した平貞文と伊勢の御の——あるいはこの男・女についての「作品」
であると言うほかない。現存本は『平仲物語』・『伊勢集』として伝存す
るが、これらは『篁物語』とは別世界のきわめて現実的な、私小説的な
歌日記である。だが、両者の作風において、「こころ」と「ことば」に
よる情念の吐露の態度は『伊勢物語』とはまったく異質だとわたくしに
は思われる。だが、宇多帝歌壇における「みやび」の変奏として一考に
は価いする。そのことはまた次稿で詳説したい。